

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	アブラール アブドルマナン バール
論文審査担当者	主 査 奥田 敦		
	副 査 廣瀬陽子		
	野中 葉		
	宮川祥子		
学力確認担当者：			
論文タイトル： A Comparative Study of Empowering Women in Management of Higher Education Institutions in Saudi Arabia and Japan: Current Situation Analysis and Proposal System for Improvement.			
論文審査の要旨： サウジアラビアの女性の社会進出に関して、これまでほとんど研究が行われてこなかった高等教育機関について取りあげ、その現状と課題、今後の戦略などを、関係者に対する丁寧なインタビューによる日本との比較研究によって明らかにした労作。大学で管理職にある女性教員を、意図的スノーボール・サンプリング法により抽出し、日本とサウジの両国において、現状を中心に詳細なインタビューを行うことを通じて、課題と障害を明らかにし、解決へと導く具体的な戦略を提示した。 序章では、研究の概要を、2章では先行研究を紹介し、諸外国の関連事例を俯瞰する。第3章では、インタビューの手法を中心に本研究の方法について論じている。 それらを受けた第4章で、サウジ、日本双方の高等教育における女性の社会進出の実態にかかわるインタビューの結果がまとめられている。日本では複数の大学にわたって女性管理職に話を聞いている。これに対しサウジについては、1999年に設立された女子大学ダール・ル・ヒクマ大学に特に注目し、インタビューを行ない、日本とサウジの双方において、女性の社会進出を奨励するプログラムの必要、子供のケアを含むインフラの整備、高等教育機関における男女平等オフィスの設置の必要が戦略として挙げられる。 第5章では、イスラームにおける女性の地位について、そのほかの宗教との比較も交えながら、イスラームが、サウジの現実とは裏腹に、女性の社会進出に対して極めて肯定的であることを明らかにするとともに、教えのレベルから引き出されたいくつかのツール、すなわち、イスラーム法の適切な運用、適切な分離による女性の安全確保、女性に対する教育と能力の向上を、イスラームが本来求めていることを明らかにする。 第6章では女性の社会進出がイスラーム的にも求められていることを踏まえ、状況改善のために提案を行うシステムを提示している。それは、女性によって運営されていない大学、あるいは、不適格な女性によって運営されている大学を、4段階の漸進的なサブシステムを動かすことによって、社会は、女性のリーダーを受け入れることができるようになり、大学は、適格な女性によって運営されるようになり、さらに社会に認められた女性指導者が輩出されるようになるとする。 終章に当たる第7章では、サウジアラビア政府の現行の政策にも配慮しながら、しかし、提示した提案システムの実装を視野に入れ、慎重に全体をまとめている。 さて、サウジアラビアは、イスラーム教徒が大多数を占める国家の中でも、とりわけ、男女の区別の激しい国である。本論では、女性の安全を確保するための分離が大きく取り上げられていたが、イスラームにおいて男女の関係は補完的であり、その補完性が発揮されるべきは家庭だけに限った話ではない。その補完性の観点から言えば、本論で示されたシステムは、サウジにおけるイスラームの実践の現状に即したものとなっている。その現実性において本研究は高く評価で			

論文審査の要旨及び担当者

No.2

きる。

当初、彼女が本研究を開始したころ、日本は、近代化と伝統の保持を両立させた優れたモデルとして想定されていた。それは、イスラームを単なる伝統としてとらえ、その伝統と近代化をサウジでも両立できれば、女性の社会進出は成功するという、単純で素朴な比較研究でしかなかった。ところが、SFCでの学びを通じて、イスラームには伝統を超えた普遍性があり、事態を映し出す鏡として用いることが可能であり、同時に、現在のイスラームには、圧倒的に実践が欠けていることの認識も新たにされた。そのことによって、彼女の研究は、伝統としてのイスラームではなく、教えとしてのイスラームをベースとし、実践を基調にするものとなったのである。いわば、イスラームに命を吹き込む研究に仕上がったのである。

おそらく女性の社会進出をめぐり、今後生じるであろう、分離から補完へという流れの中でも、本論で実践してくれたようにイスラームを発想の源泉として活かすことができれば、イスラーム法がまさにそうであるように、あらゆる事態に柔軟にしかもぶれることなく対応できる。

その点で、本研究を通じて、彼女が今後独立した研究者として研究活動に従事し、まさにサウジ社会を変革し、先導する女性のリーダーとして活躍できる資質の持ち主であることがはっきりと確認できた。

よって、審査担当者全員は、本論文と、その執筆者、パール・アブラール・アブドルマナン君が、政策・メディア研究科博士学位授与に相応しい学生であると一致して結論づけた。